

イーマ第83回 蓮見賢一郎先生 講演録 2008. 4. 30

テーマ「ガンの予防、治療、ケアの極めつけ療法」

講師 蓮見 賢一郎先生

米国法人蓮見国際研究財団理事長

医療法人ICVS 東京クリニック理事長、

米国トーマスジェファーソン大学医学部客員教授、

中国吉林省腫瘍院名誉院長、

医療法人珠光会理事長

著書:「免疫力でガンと闘う」(法研)、

「最後まであきらめない患者さんへ最後まであきらめない医師が贈る愛のガンワクチン」

(エディタープロダクツ)他多数。

■ 転換期を迎えているガン治療の現在

現代の医療は、ガンを治療するうえで2つの大きな問題を抱え、行き詰っている。

1 つは、抗ガン剤や放射線療法の際に伴う激しい副作用の問題である。これらの治療では、強い攻撃力でガンのしこりを消失させることができるが、その攻撃力の強さゆえに、ガンだけでなく、患者さんの体の健康な部位にも被害を与え、さらに著しく体力も衰えさせてしまう。

もう1つの問題は、手術・放射線治療・抗ガン剤というガンの三大治療法では、進行がんや再発ガンを完全に克服できるまでに至っていないことである。

しかし、こうした問題は今日ワクチン療法が大きな解決方法として実績を上げてきている。

攻撃力の強さだけを求める治療法だけでなく、確実にガンを見つけ、ガンを排除することができるのがワクチン療法である。

また、これまでの三大療法のそれぞれの長所を活かしながら、そこにワクチン療法を加えることができれば、末期段階で治療が困難になった患者さんも命が助かる可能性が大いに出てきているのである。

■ 医師は免疫療法をほとんど認めていない

現在、免疫療法に対する一般の医師においては期待度はものすごく低いものだと いえる。ほとんどの医師は免疫にはガンを治す力は無いと思っている。その一番の理由が、免疫はガンに一度負けているからというものである。免疫の力が低下したから、ガンになったわけで、そんな一度ガンに負けた免疫に期待できないというのが、一般の医師の考え方である。

■ 手術だけではガンは治らない

早期発見のガンは、ほぼ手術で治療することが可能であるが、ある程度進行した

ガンは、手術でしこりを取り除いても、どうしてもその周辺にいるがんの芽までは取り除けない場合がある。その取り除いたガンの芽がしばらくするとまた増えてきて、しこりになってしまうのが、ガンの再発である。

ガンが再発した場合には、基本的には手術は行わない。なぜなら、再発ガンは進行のスピードが速く、1つの部位でガンが見つければ、転移したガンが他の部位にもあると考えられるので、一ヶ所のガンのしこりを取っても、ガンを完全に切り取ったことにはならないからだ。

再発ガンの場合は、患者さんの体力は落ちているし、さらに大きな負担をかけることになるから、完全に治る見込みがある場合を除いて、手術の選択肢は無いといえる。

■ガンワクチンによるガン免疫療法がガン治療を変える

健康な体の中では、日々発散するガンの芽は免疫の活発な活躍によって排除されている。したがって、ガン免疫療法によって、一度弱まった免疫を復興させて、以前のようにそのちからを十分に発揮できるように導いていけば、再び免疫がガンと闘い、ガンを消失させていくことも可能になるのだ。

ガンの三大療法が立ち往生している現在、次のステップとして、ガンワクチンによる免疫療法が救世主として研究されている。

■免疫力の働き

免疫のシステムは、大きく分けて2つのグループに分かれる。まず第一のグループは、外から侵入してくる細菌やウイルス、あるいはガン細胞を発見し、それが異物であると「認知」するグループである。

その異物を発見し、「認知」する免疫は、言ってみると監視・司令塔の役目を務めるグループで、主にマクロファージと樹状細胞という白血球が担当するのである。

第二のグループは、実際に異物と認知されたものを攻撃し「排除」する実践グループで、T細胞やB細胞などが任務にあたるのである。

これらの実践グループが病気の原因となる細菌やウイルスと闘って排除してくれているので、我々は健康に生活していけるわけである。

■マクロファージと樹状細胞

マクロファージは言わば体の掃除屋さんのようなものであり、貪欲細胞とも言われている。例えば、体のある箇所にガン細胞の死骸があると、そこに遊走していき、それを食べてしまい、さらに細かく分子レベルにまで分解するのである。

そして、次にはその情報を樹状細胞に渡すのである。

樹状細胞は、マクロファージから渡された物質の情報について、「正常細胞によるものか、それとも異物なのか」を認識する働きを担っている。

樹状細胞による「異物を認知する」という働きが行われてはじめて、実践グループの「排除」のスイッチが入るのである。

免疫だけが持っている「ガン細胞を発見する能力」とは、この樹状細胞の働きのことであり、免疫の活動の中で最も重要な役目を果たしているのである。

■ガン抗原という目印

抗原とは、我々の体が本来持っていないもので、相手を異物と認知するための物質のことである。

免疫(樹状細胞)の認知の働きは、このガン抗原を見つけられるかどうかにかかっているのである。

免疫が抗原を見つける手順としては、まず、マクロファージがガン細胞を食べて分子レベルに分解する。その分解したものを、樹状細胞が取り込んで識別を行う。そして、樹状細胞は異物であると認知したものを、実践グループの白血球が気づくように細胞の膜の上に提示する。樹状細胞は「抗原提示細胞」と言われるが、そうやって目印として膜の上に並べられたものが、「ガン抗原」である。

■自然免疫と獲得免疫

免疫は「記憶」というとても優れた能力を持っている。この「記憶」のお陰で、我々は二度と同じ病気にかからないのである。

この「記憶」の観点に立てば、免疫は二種類に分けることができる。1つは、生まれながらにして持つ「自然免疫」。もう1つが後天的に獲得していく「獲得免疫」である。獲得免疫は、免疫がウイルスや細菌に対して作った「記憶」によってからだの中に呼び出されるのである。

自然免疫は「記憶」という能力を持っていない。だから、どんな相手でも同じように反応を示す。異物を認知するマクロファージや樹状細胞は自然細胞である。そしてもう1つ、異物を排除するNK(ナチュラルキラー)細胞という白血球がある。

これらの免疫は元から体に備わっているから、異物が侵入すると真っ先に向かっていき相手を認知したり、排除したりする。

■異物を真っ先に排除するNK細胞

NK細胞は自然免疫の中で唯一排除型の免疫である。

NK細胞は、真っ先に異物の存在に気づき排除するが、ガン細胞のように手ごわい相手に対しては、排除の能力に限界がある。

そこで、どんな相手にも同じように非特異的に攻撃する自然免疫ではなくて、相手の特徴に合わせて、特異的に攻撃する獲得免疫の出番になるのだ。

■獲得免疫とは何か

獲得免疫は、基本的には異物が侵入し、その情報をマクロファージや樹状細胞から受け取らない限り発生しない。あくまで、免疫学的な記憶に基づいて、再度同じ抗原が体に侵入した時に、その抗原に対して強い反応を起すことを、獲得免疫という。

記憶という働きを持つから、その記憶に沿った特定に異物に対してのみ反応する。T細胞やB細胞というリンパ球がこれにあたる。

■ガン細胞「排除」の主役となるCTL

キラーT細胞のうちでもCTLというリンパ球が実際に強い攻撃力をもってガン細胞を排除している。

CTLは「死の抱擁」をすることで、ガン細胞に攻撃を仕掛けている。つまり、CTLはガン細胞と接触して、互いの膜と膜を触れ合わせ、そのことによって、ガン細胞が自ら消滅していくように強く誘導していくのである。

■「認知」の働きが免疫システムの要

免疫システムはマクロファージやNK細胞という自然免疫担当細胞が、真っ先に異物に対して行動を起こし、樹状細胞がそれを異物であるのかどうかという認知を行う。そして、樹状細胞から、異物情報を受け取ったヘルパーT細胞を介して、キラーT細胞の1つ、CTLという実践グループが出勤し、直接ガンを排除していくのである。

ここで重要なことは、樹状細胞の認知の働きがこの免疫システムの要になっていることである。

つまり、ガン細胞を排除する免疫の全てのカギを握るのが、ガン細胞を異物として「認知」できる樹状細胞だと言える。

ガンワクチン療法は、この樹状細胞の「認知」の働きに注目した療法である。

■免疫の「記憶」という働きを利用するワクチン療法

ワクチン療法は予防したい病気のウィルスの特徴を「教材」として体の中にいる「生徒(免疫)」に与え、その特徴を認知させ、記憶を残すように教え込むことによって、病気に二度とかからないようにすることである。

ガンに対して異物反応できなくなった樹状細胞に教育を行い、ガン細胞は異物であることを再び「認知」させることが、ガンワクチン療法の最大の目的である。

■ガン抗原を見つけることがガンワクチン療法のポイント

ガン抗原といういわゆる正常細胞とガン細胞の違いを樹状細胞に教えることが、ガンワクチン療法のもっとも重要なポイントである。

患者さんの体から、ガン細胞だけが持っているタンパク、つまりガン抗原を取上げ

る。それを無毒化してワクチンという形にして樹状細胞に教えてあげる。すると、樹状細胞はそのガン抗原を持っている細胞を、再び異物だと認知するようになるのである。

■もっとも効果の高い免疫への「教育」とは何か？

近年、樹状細胞の働きが解明されたことによって、より教育効果の高いガンワクチンの開発が可能になった。

それが、ガンのしこりの中に直接樹状細胞とアジュバントを入れて、そこにいるガン細胞を教材として使い、学習させるという方法である。

この方法は、一度体外に取り出したガン細胞を教材として使うよりも、格段に早くそして非常に高い確率で教育に効果が得られるようになったのである。

■短期間で効果を実証できる「治療型」ワクチン療法

ガンのしこりの中でガン細胞を樹状細胞に学ばせるという新しいガンワクチン療法は、免疫への教育の仕方として最も理想的な療法と言える。

実際にこの新しく開発したガンワクチン療法を用いて、患者さんに治療をおこなうと、ハッキリとした効果が現れるようになった。短期間で効果判定をできるのが、この新しいガンワクチン療法の大きな特徴である。

■余命を宣告された患者さんが治っていく

現在「治療型」ガンワクチン療法は、進行ガン、再発ガンの患者さん、中でも末期の段階で、余命を宣言された患者さんのしこりを消失させることを目標に開発が進められている。

これまで行ってきた治療の中で、「余命半年」と医師から宣告された患者さんのガンの縮小にも成功している。

医師からは、「もうこれ以上治療ができない」と言われていたガンのしこりが、「治療型」ワクチン療法を始めてすぐに小さくなったので、医師としても「治療型」ワクチンの効果を認めざるを得なくなった。

■「治療型」ガンワクチン療法はこれまでの免疫療法を変える

現在は、一部の医師の間では、やっとな免疫療法を見直そうという動きが出てきている。しかし、そんな医師でも、免疫療法を医療による三大医療法をカバーする補助的なものとして捉えている人がほとんどである。

もちろん、免疫療法は、抗ガン剤による副作用やガンの進行による痛みを和らげる効果を持っているし、とても重要な働きを担っている。しかし、免疫の力はそれだけではないことを、もっと広く伝えていきたい。

「治療型」ガンワクチンの改良が進めば、今後は抗ガン剤に負けない治療効果が証明できるはずだと確信している。

ガンワクチン療法が、既存の手術・抗ガン剤・放射線の三大療法の中に組み込まれることになれば、これまでのガン治療のあり方は大きく変わるはずである。ガンが深刻な症状に進行し、抗がん剤の治療も効果が得られないと言われ、余命を宣告された患者さんに、ガン免疫療法が大きな力になれるはずである。

■ガンは最後まであきらめない

現在、「治療型」ガンワクチン療法であれば、再発ガンでも、3cm・10g以下のものであれば、抗ガン剤に抗体が無い人であれば、治る可能性は非常に高いと言える。逆に、抗ガン剤が効かなくなってからでは、治る可能性は低くなってしまう。

是非、早い段階でのガン発見に努めるために、PET-CT(ペット・シーティー)という検査をお勧めする。

しかし、ガンが進行して症状が深刻な場合でも、単に三大療法のみに限らず、「治療型」ガンワクチン療法があることを忘れないで欲しい。

これまで、抗ガン剤と免疫療法は、その性質上併用は無理だとされてきたが、「治療型」ガンワクチン、全ての治療を上手く使い分けていくことができる治療法なのである。したがって、ガンワクチン療法なら、手術だけでなく、抗ガン剤や放射線療法を組み合わせることにより、より確実な効果が期待できるのである。

■最後に

進行ガン、再発ガンの場合でも最後まであきらめることはない。ガンを治療するうえでもっとも大切なことは、「絶対に治る」と信じることである。

今後も、余命を宣告された人々を治していきたいと思っている。

【当法人グループについて】

ガン専門の予防から治療、更にホスピスまでトータルに最新の療法を用いてトータルにカバーしている。

蓮見ワクチンは先代が1948年に開発、改良に改良を重ね、今日まで15万人以上の患者さん達が受療されている。

ガンを克服する生活三条件

- (1) 睡眠を充分にとる
- (2) 食事に注意する
- (3) ストレスを受けない生活をする

治療について

ワクチン免疫治療は手術時に入院が必要。それ以後は通院で完全治癒が可能。費用は概ね手術時200万円、ワクチン治療に150万円かかる。